



【男女共同参画社会の実現をめざす情報誌】

OKAYAMA
2009.1
vol. 34

さんかく社会のバイオニア vol.6

「さんかく岡山」既見當ってどんなトコ??

DUO

【デュオ】

特集

デビューしてみませんか?

「さんかくウィーク」に!

enjoy! (楽しむ)

「さんかく」Life!!



岡山市

デビューしてみませんか？

皆さんは、「さんかくウィーク」を知っていますか？

「何のこと？」そんな声が聞こえてきそうですが、この「さんかくウィーク」は、岡山市男女共同参画推進週間の愛称で、平成20年6月で7回目を迎えています。「さんかくウィーク」中には、色々な楽しいイベントや講演会等が繰り広げられています。今回の特集では、「さんかくウィーク2008」に焦点をあて、どんな人たちが「さんかくウィーク」を支えているのが取材しました。

赤井実行委員長に「さんかくウィーク」デビューのきっかけなどを振り返っていただきました。



実行委員長
赤井 律子さん

まずはラクな気持ちで

DUOの編集委員をしていたのと、日本女性会議に参加したのがきっかけで市の職員に声をかけてもらいました。私ひとりでは心細かったけど他にも初めて参加するという人がいたのでラクな気持ちで入りました。今年で2度目の参画です。

自分の時間もできたので

今年のはたまたま自分の時間ができたので実行委員長に推薦されたときは「よし、がんばってみよう」と思いました。なるべく自分の言葉であいさつができるように練習したり、講演に来られる講師の本を前もって読んだりしました。そして第一線で活躍している講師の人と直接お話ができただけでも貴重な経験になりました。

舞い込んできた「縁」を大切に

自分にできることは努力して自分の歩幅で実行すること。そして無理なくやり続けることが大切だと思います。舞い込んできたお話は「縁」だと思い、自分のできる範囲で前向きに取り組むことが楽しく続ける秘訣ですね。

実行委員長の大役を終えて

ウィークの全日程を頭に入れ、宣伝に明け暮れる毎日で大変なこともありましたが、とても充実した時間を過ごすことができました。これからもゆるめることなく、立ち止まることなく、積極的に男女共同参画に関わっていきたいという気持ちになりました。

実行委員として実力を発揮している藤さんに「さんかくウィーク」への思いを伺いました。



実行委員
藤 弘司さん

広がり☆エンジョイ☆フレンドリー☆これが私のモットー！

1回目のウィークからずっと実行委員をしているので、付き合いは長いですね。時々厳しいなあと思うときもあるけど、自分の趣味の音楽を取り入れたりしながら「エンジョイ」できるのがやっぱりいいですね。2008では路面電車で演奏会をしたことが楽しかったです。また横の広がりをもつために、今回は実行委員で鍋パーティーもしましたよ。実行委員同士が仲良くしないといい発想も生まれてこないからね。

私の理想は・・・

「さんかくウィーク」を楽しみながら市民が男女共同参画についての理解を深めていくこと、そして行政がそれをサポートすること、それが私の理想です。

個々人からつながる趣味の友人や近所の人も遠慮なくひっぱりつけて男女共同参画の輪を広げていきたいですね。

みんなの力が集まって広がる参画の輪

おふたりのインタビューを終えてこちらまで元気をいただきました。「楽しむ」ことを決して忘れない。このことがいつしか社会をも変えていくパワーになるような気がしました。また、さんかくウィーク実行委員のみなさんの笑顔の輪は、岡山市の男女共同参画の推進を支えてくださっていることをあらためて実感しました。

取材者/横尾

味がせよう

聴め台おう



葉さんもご満悦！初の路面電車コンサート。

「さんかくウィーク」に!



みんなでハッピー、お祭り気分です。

イラストデザインで「さんかくウィーク」デビュー

毎年開催される「さんかくウィーク」は、その年ごとにテーマがあります。「さんかくウィーク2008」のテーマ、「**咲かせよう 自分の生き方 認め合おう みんなの生き方**」に沿ったイラストを募集したところ、日笠亜衣さんの作品(中央イラスト)が最優秀賞に輝きました。

この作品は、市役所の市民ホールに展示されたり、ポスターのメインイラストや各種チラシのイラストに使われたりしました。「さんかくウィーク」の記念セミナーで、日笠さんに賞状と副賞が授与されました。自分のイラストがポスターになるチャンスです。次回の「さんかくウィーク」のイラスト募集にみなさんも応募してみたいかがですか。

詳しくは「市民のひろばおかやま」2月号をご覧ください。



最優秀賞受賞の日笠 亜衣さん

最優秀賞決定理由

ほのぼのとした表情の二人は、お互いを慈しみ合う雰囲気を醸し出し、支え合う手と手のつなぐが見る者を優しく穏やかな気持ちにさせてくれます。また、それぞれの人の個性や多様な生き方を中央の多数のハートで象徴的に表現し、互いに認め合う心の広さが柔らかな色調で表現された素晴らしい作品です。

実行委員一人ひとりの力が大きな力に!

実行委員の中には、自ら講師となる折り紙のイベントを企画したり、講演会で飾る花を生けたりと自分の趣味や得意なことを活かしている人もいれば、初めての司会など、経験していないことにあえて挑戦している人もいます。

また、暑い季節にペンギンの着ぐるみに入って保育園児とパレードをしたり、色々なイベントの裏方の仕事をこなしたりと目に見えないところで活躍している縁の下の力持ちの存在の人もいます。

色々な場面で、一人ひとりの実行委員が楽しみながら自分の持てる力を発揮したことが大きな力となり、「さんかくウィーク」を支えていたのです。



園児たちもデビュー! オープニングパレード。



みんなでやると、新しい発見がある。

みんなの協力で、盛り立つこの街。

「知って認める」



エンジョイ「さんかく」ライフ

enjoy!

女性も男性もともに、のびのび、そんな生活を送るのに大切な、

「テレビを見る目を変える、

～メディアは事実を伝えているが～

「育児休暇を取ろうと決めた時、「男が育児休暇を取るのか」という周囲の空気を感しました。この日本社会の空気こそが、男女共同参画社会の実現を阻んでいる最大の壁」と下村健一さんは話し始めました。

それでは、その空気を変える道員とは…!?それがメディアです!!

★メディアとの付き合い方

何かあったらそれを撮るのがメディアの仕事。もちろん事実を伝えていますが、メディアには事実の特殊なある部分だけを切り取って伝えるというクセがあります。視聴者にも自分が受け取った情報だけで全部だと思ってしまうクセがあります。

この2つのクセが重なり合って、メディアの発信する色々なイメージが、そのまま社会の空気になっているのです。

例えば、犯罪報道の際にメディアは、容疑者の怪しい点を取り上げますが「怪しくない点もたくさんあります」とは言いません。

全体像を余すことなく伝えてくれるメディアなどないのです。

また、男性像・女性像にしても、メディアの発している「男たるもの洗濯物は干さない」なんていう家事に対するイメージも、すごく根深い、無意識のところまで一人ひとりの人間を縛っているのです。

だからメディアからの情報を鵜呑みにするのではなく、「今日見たメディアでは、こういう情報を言っていた」という留保付きで冷静に受け止めることが大切です。

★編集委員の直撃すばつとインタビュー

Q 育児休暇を取ろうと決めたきっかけは、何だったのですか。

A 私は何でも初モノが好きなんです。テレビ業界では誰も取っていなかったというのが一つの理由。もう一つは、妻のお腹の中の2cmくらいのかたまりをエコーで見た瞬間、わが子をいとおしいと思ったんですよ。

Q 育児休暇を取ることにした時の周りの反応はどうでしたか。

A 職場の女性は、「拍手して」大絶賛。男性は、「えっ?」というような複雑な反応でした。確かに育児休暇をとると周りのみんなにシフ寄せはいきます。でも、お互いにシフは寄せ合えばいいと思うんです。

Q 育児休暇を取ってみてどうでしたか。

A 「休み」というよりは、「労働」ですね。報道の仕事は、ポケベルが24時間いつ鳴るか分からなかったけれど、育児も同じ。赤ちゃんがいつ泣くか分からない。かなり大変だったけど、こんなに楽しいこともなかったです。世間でどんな一大事が起ころうとも赤ちゃんの周囲1m位は全く平和で、そこが幸せの一番の基本だと気づきました。男性の育児休暇は、女性の負担軽減のためというイメージがありますが、「男性の幸福追求のための育児休暇」という風に考え方を換えれば、男性の育児休暇をとる人も増えるし、周囲の空気も変わってくるのではないのでしょうか。

Q 育児で一番大変だったことは何ですか。

A 公園デビューですね。公園にいるのは、ほとんどがお母さん。人と気さくに話せる私でも、お母さんたちのグループに入っていくのは勇気がいりましたね。でも、当時公園で仲良くなった仲間たちとは、いまだに家族ぐるみの付き合いが続いていますよ。男女共同参画社会というと、女性が男性中心の企業社会に入っていくイメージを持たれますが、男性が女性中心の地域社会にすっと入り、居場所を確保できることも大切なことなんです。



講師 下村健一さん (「あひるのこころ」キャスター)

市民メディアアドバイザー、元TBS報道アナウンサー。

●日本のテレビ業界で男性初の育児休暇を取得。

育児へのユニークな考え方に感動!

下村健一さんは、テレビ界の人らしく、きびきびとした態度の方でした。最初は育児労働という感覚を抱いた時期もあったようですが、公園デビューなどの経験を経て、育児への新たな視点を導かれたと言っていました。その育児過程のひとつひとつの感動を通じて、男性の育児参加の大切さを教えていただきました。奇蹟の日本では、下村さんが取得した「夫としての育児休暇」が、特別のものでなく、ユニークなものでもなくなっていることを願ってやみません。下村健一さんに続きましょう。子育てのプロセスを夫婦で共有しましょう。子育ての楽しさが、さらに増すことでしょう。

取材者/田中



「さんかく」Life!!

いきいき、そして自分らしく暮らすこと。それが「さんかく」Life。
とっておきの知恵を「さんかくウィーク」で行われた講演会から拾ってみました。

“すぐ忘れる男 決して忘れない女、

～それでも築ける“すてき”な関係～ **レポート**

男女には、外見的な違い、生体的な違いがあるという程度の知識しかありませんでしたが、講演を聞き、男性と女性では、食べ物が胃を通過するのにかかる時間や心臓発作が起こる前に痛くなる場所が違うなど、体の器官や病気の症状までもが異なるということを知りました。

脳にも違いがあって、女性は右脳と左脳の両方を使い、いくつものことを並行して行うのが得意ですが、男性は左脳を使って一つのことを集中して行うのが得意です。また、嫌な記憶に対して、女性の脳はそれを蓄積しやすく、男性の脳はそれを忘れやすいのです。

女性の皆さん、テレビを見ている夫や恋人に話しかけた時、上の空の返事で、「あなた、聞いているの!」と怒ったことはないですか。

男性の皆さん、噂をした時、全く覚えのないことを持ち出されて、「あの時こう言ったじゃないの!」と妻や恋人にまくし立てられたことはないですか。

“すぐ忘れる男 決して忘れない女”は、そんな脳の働きの違いから起こっていたのです。

下村さんは、男女が“すてき”な関係を築くために心がけたいこととして、「女性は、男性に大切な話をする時、予告してきちんと向き合い、脱線しないように簡潔に話すこと」「男性は、妻や恋人が話をしている時、表情豊かにうなづくなどして、聞いているよという意思表示をすること」などを挙げられました。

ただ、これらの男女の違いは、生まれながらにしてすべてが組み込まれているというわけではなく、育った環境や経験したことからの影響があるということ。そして個人差もあるということも付け加えられました。

これらのことを知った上で、男女が互いに学び合えば“すてき”な関係を築くことができるのだと分かりました。



男女が互いに学び合い、築き合うことの大切さ

講師 下村満子さん (ジャーナリスト)

元朝日新聞ニューヨーク特派員、元「朝日ジャーナル」編集員、アメリカ、中国、旧ソ連などに特派され、数々のインタビューやルポルタージュを連載。国際報道に貢献した記者に与えられるボーン・上田国際記者賞を女性では初めて受賞。

イキイキとしたお話を聴くのが楽しみです。

満子さんの人となりをより身近に感じ、満子さんの“氣”と言葉をいただきました。“いかに生き、いかに死ぬか”。これは偉人の心です。人として目的意識を持ち、人の為に無私の心で今日一日をワクワクしながら大切に生きること、常に笑顔を忘れずに…。満子さんいろいろな人との出会いを上手に活かし、すてきな関係を築かれているところに心を打たれました。 取材者：三宅

編集委員の交流会潜入レポート

携帯電話やパソコンがどんなに発達しても、顔と顔を付き合わせたコミュニケーションが大切と言う下村満子さん。講演後に実行委員との交流の場が持たれました。下村さんは「人のためにする。これが原点。何かをして、“ありがとう”と言われると理屈抜きにうれしいし、ワクワクする。それが自分の原動力にもなる」と打ち解けた雰囲気の中で話されました。

実は、交流会での下村さんの最初の言葉は「こんなにたくさんの方の支えがあって、今日の講演会が成り立ったんで、皆さんありがとうございますございました」というもの。これが、やや緊張していた空気を和ませ、皆の顔をほころばせたのでした。

交流会での下村さんの話の中で特に印象に残ったのは、「今日一日のこの瞬間瞬間を100%ハッピーに燃焼して暮らす。その繰り返しは人生。過ぎたことをくよくよ考えても仕方がない。もちろん反省は必要だけど、いつまでも尾を引いては、ストレスがたまってネガティブ(否定的)になるだけ。前向きになることが大切」という言葉。下村さんのパワーの根底に流れる考え方に触れ、目の前が明るくなったように感じました。

また、実行委員から、「講演以外に、本当にここでいっぱい良いことが聞けました。ありがとうございます」と心の底から寄せられた言葉も印象的でした。



「さんかく」Lifeに少しは興味を持っていただけでしたが、ちょっと気になるという皆さん!
「さんかくウィーク」にデビューしてみませんか?
「実行委員になるのは、ちょっと…」と思われる皆さん、まずは、イベントへの参加から始めてみてはどうでしょう。今は運う「さんかく」Lifeが待っていますよ。



※この2つの講演の様子を、市男女共同参画社会推進センター「さんかく岡山」で視聴できます。



池山 直選手

プロボクサー 池山直選手

岡山市職員として働く一方で、女子国際ボクシング協会(WIBA)世界チャンピオン! さらに日本ボクシングコミッション(JBC)が公認する世界ボクシング評議会(WBC)の王座をめざす池山直選手を紹介します。



★ボクシングを始めたきっかけ

仕事が終わると家に帰りテレビを見る。そんな単調な毎日から抜け出して、何か体を動かすことがしたいなとぼんやり思っていたところに、「新しくボクシングジムができたらしいよ」という友達の良い一言。「何か面白そう。行ってみようかな」という気持ちが出てきて、ジムの門をたたいたのが、2001年春のこと。ボクシングとのかかわりは、軽い気持ちから始まったのです。

★プロボクサーに…そして世界チャンピオンへ

生活が一変し、仕事が終わるとジムへ通う毎日。練習をすればするだけどんどん上達していくのが面白くて、ボクシングにのめり込んでいきました。メキメキと頭角を現す池山選手の姿は、ジムの会長にも、一緒に練習をしている仲間の目にも明らかだったようです。

プロになろうと思ったのは、「プロテストを受けてみては?」という周囲の空気に押されたこともあります。自分自身「どこまでやれるのか挑戦してみたい」という気持ちが強かったからです。挑戦し続ける姿勢が実を結び、プロになって3年後の2006年には日本チャンピオン、翌年には世界チャンピオンへ駆け上ったのです。

★プロボクサーの顔

デビュー戦から世界タイトル戦まで試合の大小に関係なく、常に「勝ちたい!」という強い思いをもって試合に臨んでいます。「もちろん勝つとうれしいけど、試合内容に納得できない時は、勝ってもすっきりしませんねえ。自分が練習してきたことがある程度出せて自分なりに納得のいく試合だったら、達成感があるんですけどねえ。そういう試合は少ないです」とプロボクサーとしての顔をのぞかせる池山選手。そんな彼女も、デビュー戦では自分が何をしたかも覚えていないくらい緊張していたそうです。「実は、リングに上がる時き青コーナーから出ないといけなのに、赤コーナーから出てしまって、決まり事さえ知らなかったんですよ」と当時を振り返り、笑いながら話してくれました。

★職場での顔

「昔からスポーツが好きで、テニスやスキューバダイビングをしていましたね。最初に配属された住民課でもフットワーク軽くこまごまと動き、てきぱきと業務をこなしていた印象です」と語るのは、彼女の市役所入庁時からの付き合いで、池山直後援会長も務める光本課長補佐。「僕は先輩なんだけど、そう言えば敬語を使われたことは一回くらいしか記憶にないなあ。気がついたら友達感覚。いつも自然体。ぶっさらぼうに見えるけど、実はみんなに気を使っている。だから友達も多いんですよ」と彼女の人格を明かしてくれました。



仕事もボクシングも両方大切。

★仕事とボクシングの両立

池山選手の気持ちの中で、ボクシングの占める割合は3分の1。残りの3分の2は、仕事と遊び。仕事や遊びがあるからこそ、練習がつかなくてもボクシングを続けられています。「ボクシングのことを考えない時間があるのが、かえっていいんですよ」とにっこり。仕事の時にはいそしみ、ボクシングの時は心身ともに打ち込み、遊びの時はリラックスしてめいっぱい楽しむ、こういう気持ちの切り替えや時間の上手な使い方が、仕事とボクシングを両立させているコツだと感じました。

「さんかく岡山」託児室ってどんなトコ??

「さんかく岡山」託児室では、経験豊富なボランティアがお子様を3時間までお預かりします。

例えば...

就活活動をしたい!!
買い物に行きたい!!
病院に行きたい!!
たまには息抜きしたい!!

初めての方は会員登録を
しますので、必ずお子様の
健康保険証と保護者の方
の身分証(運転免許証など)
を持ってきてください。

そんな時も大丈夫!!
電話1本で予約ができます。

TEL
086-803-3355

(託児室内の様子)



(ベビーベッド) (人気車のおもちゃ) (子ども用トイレ)



託児ボランティア募集中!!

「さんかく岡山」託児室では、託児スタッフとして活動していただけるボランティアを随時募集しています。

★こんな人、持っています!

- ・乳幼児の保育に熱意がある人
- ・社会参加をしてみたい人
- ・ボランティアに興味がある人



お問合せ先

岡山市男女共同参画社会推進センター「さんかく岡山」

〒700-0822 岡山市表町三丁目14番1-201号

TEL 086-803-3355 FAX 086-803-3344

E-mail:sankaku@city.okayama.okayama.jp

http://www.city.okayama.okayama.jp/shimir/danjo/center/

託児の流れ

<1週間前~前日>

①予約

電話か来館の上、希望の日時及びお子様の年齢をお伝えください。
(対象年齢:生後3ヶ月~未就学児)

<当日>

②受付

お子様をお預かりする前に、書類に必要事項を記入し、健康状態をチェックします。
また、お迎え時に間違いがないように写真を撮ります。

③託児室

いよいよ託児室へ。ボランティアが笑顔で迎えてくれます。最初は泣いてしまうお子様もいますが、経験豊富なボランティアがあの手この手で次第にお子様の心をつかみます。

④精算

お迎えの前に事務室で精算をしていただきます。託児料は1時間600円で、館内を見学していただくと、お子様1人につき100円の割引が受けられます!!

⑤お迎え

お迎えの時には、託児ボランティアが託児中のお子様の様子を教えてください。

利用案内

●前日までに要予約(1週間前から受付)

対象:生後3ヶ月~未就学児

料金:1時間600円(1回3時間まで)

時間:(平日) 10:00~18:00

(土日祝) 10:00~16:00

閉館日:火曜(火曜が祝日の場合は水曜) 年末・年始



事業者表彰

岡山市男女共同参画社会の形成の促進に関する事業者表彰

岡山市では、雇用の分野における男女共同参画社会の形成に関する取組の普及を図るために、積極的な取組を行っている事業者を表彰しています。

さんかくウィーク2008の記念セレモニーで表彰式が行われ、市長から表彰状と賞が授与されました。

市内に事業所があり、男女共同参画社会の形成に積極的な取組を行っている事業者を4月頃に「市民のひろばおかやま」等で募集しますのでご応募ください。

平成20年度受賞事業者

株式会社 デンショク

デザイン設計部門をはじめ、これまで男性しかいなかった製造部門など社内のすべての部門に女性を配置するとともに、女性の意見を取り入れることで、残業を減らし清潔で働きやすい職場づくりに努力されていることが、女性の能力発揮を推進するものとして高く評価されました。

株式会社 バンケットサプライ

女性が働きやすい環境を整え、仕事と家庭の両立支援を行うとともに、管理職へ女性の登用を積極的に進めるなどの取組が、女性の能力発揮を推進するものとして高く評価されました。



株式会社デンショク



株式会社/ンケットサプライ

配偶者や恋人からの暴力に悩んでいませんか？
一人でかかえこまないで、話してみませんか？

岡山市男女共同参画相談支援センター
(配偶者暴力相談支援センター)

相談受付時間 平日 10時～19時30分
(火曜日・年末年始12月29日～1月3日を除く)
日・祝 10時～16時30分

相談ホットライン TEL086-803-3366

〒700-0822 岡山市表町三丁目14番1-201号 アークスクエア表町2階
男女共同参画社会推進センター「さんかく岡山」内

<http://www.city.okayama.okayama.jp/shimin/danjo/soc/>
<E-mail>sankaku_shien@city.okayama.okayama.jp



編集を終えて

「男と女の間に深く深い河がある」という歌の文句はありましたが、「明日に笑ける顔」という曲もありました。できるなら、後者の「サイモンとガーファンクル」を見たいものです。編集委員の一人として、今そう思います。最近、他者否定傾向の強い人が多いように感じられることがあります。しかしそれだけだと、「男女共同の国」から遠ざかってしまいます。相手の気持ちも考慮し、「明日に笑ける顔」を渡って行きたいものです。

編集委員 田中健二



初めて編集委員としての活動をしました。下村清子さんへのインタビューなど、とても興味が湧きました。多くの知人や知識を得ることができました。これからも地域の活動に、この経験を活かしていきたいと思っております。

編集委員 三宅文子



男女共同参画の推進により街にみなさんの笑顔があることを願いながら、編集の仕事させていただきました。政令都市となる岡山市の十年後はどんな都市になっているのでしょうか。働きながらも夫婦ともども育児休暇をとれる岡山市、個人の性を認め合える岡山市、暴力で苦しむ人がいなくなる岡山市、などなど。おひとりおひとりの想像した岡山市が、この情報誌をとおして希望にあふれ、笑顔でいっぱいになる都市をイメージできていれば最高に嬉しいです。

「さんかく岡山」編集 榎岡琴音



DUO vol.34

編集後記

湯々と進んでいく毎日に「何がやりたい、やらなければ!」と思っている人はたくさんいるはず。でも、思うだけでなかなか行動に移せないんですね。実は、私もその一人。今回取材した人たちは、きっかけははどうであれ、実際に一歩踏み出すことで新たな世界が広がり、その時その時を満喫しながらそれぞれに充実した日々を送っています。本気で何かを変えたいと思うなら、やっぱり行動あるのみですね。私も興味あることに出会ったら迷わずデビューして、今とはちょっと違う自分を見つかけたいと思いました。